

令和2年度

第2回

地域自立のための「人づくり
・学校づくり」実践委員会

議事録

令和2年9月24日（木）

第2回 地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会 議事録

1 開催時期 令和2年9月24日(木) 午前10時から12時まで

2 開催の場所 県庁西館4階第1会議室

3 出席者 委員長 矢野 弘典
副委員長 池上 重弘
委員 片野 恵介
委員 加藤 暁子
委員 佐々木 敏春
委員 里見 和洋
委員 白井 千晶
委員 藤田 智尋
委員 藤田 尚徳
委員 星野 明宏
委員 松村 友吉
委員 マリ・クリスティーヌ
委員 宮城 聡
委員 森谷 明子
委員 山浦 こずえ
委員 山本 昌邦
委員 渡邊 妙子

知事 川勝 平太

4 議 事

- (1) 第1回静岡県総合教育会議開催結果
- (2) 誰もが夢と希望を持ち社会の担い手となる教育の推進
- (3) その他

【開 会】

事務局： それでは、定刻となりましたので、ただ今から第2回地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会を開催いたします。

本日はお忙しい中、当委員会に御出席いただきまして、誠にありがとうございます。

私、本日司会を務めますスポーツ・文化観光部総合教育局の吉良と申します。よろしくお願いいたします。

なお、本日は豊田委員が所用のため欠席となっておりますので、御報告申し上げます。

それでは、開会に当たりまして、知事より御挨拶申し上げます。

川 勝 知 事： 皆様、おはようございます。

前回、総合教育会議が7月29日に、初めてのことですけれどもウェブ会議が開かれました。今回、実践委員会もウェブで御参加していただく方もかなり多数に上っているところでもあります。

今回、ここに里見さんが来ておられますけれども、今回から御参加ということでございますが、他にも、佐々木さんの顔も見えますね。今回から加わられている方も何人かいらっしゃるかと存じます。この総合教育会議というのは法律で決められている会議でして、教育委員会というのは教育の中立性、継続性、安定性というものを軸にして、政治の関与を入れないようにということで、これまで教育の中軸を担ってこられたのが教育委員会でした。しかしながら、戦後色々なひずみも出てきて、政府の方で、子供たちは社会総がかり、地域総ぐるみで育てようということになりまして、そこで全自治体、すなわち1,700ぐらいありますけれども、全自治体の長が教育委員会に出席をして、それぞれの社会の実相をお伝えし、そこで教育の政策を練っていくということになったので、それが総合教育会議といえます。

しかしながら、御覧くださいませ。私などは、もう偏見と独断に満ちた人間ですから。似たような人が日本の首長にたくさんいます。ですから、その偏見や独断を排するために、社会総がかりを形にするために、実践委員会というのを設けました。

実は、この法律に定められる前に、地域とともにある学校づくり検討委員会というのを立ち上げて、そのときから社会人のかがみになるような人を委員長にして、そして委員を選んで、そこで議論するということで、そのとき以来、委員長を務めていただいているのが矢野弘典さん。横綱審議会の委員長でもいらっしゃいます。NEXCO中日本の元トップでもいらっしゃいましたし、東芝ヨーロッパの社長もお務めになった方です。そういう方に委員長をお務めいただいて、実践委員会も丸5年やっているところでもあります。

今回、委員の方々の入替えがございまして、それで今回この会議に出ていらっしゃる空手の名人の里見さんとか、中部電力の重鎮でいらっしゃる佐々木さんとかいらっしゃって、そういう方に入っていただきまして、いかにして子供を社会総がかり、地域ぐるみで育てていくかということで議論していくということでもあります。

今日の議論のタイトルは、誰もが夢と希望を持って社会人になれるようにするにはどうしたらいいかと、かなり抽象的なテーマではありますが、これについて議論をいただくと。

この間の総合教育会議では、こういうウェブでやらざるを得ないこのコロナ禍の中で、ICT、いわゆるデジタル教育というものが不可避になるであろうということから、このICT教育をどうするべきかという議論をいたしました。これは後で、また御報告があるかと存じます。

それから、ICTというのは何といってもこれは技術です。ですけれども、人間は立派な人間になっていくことが大事で、これを我々は「富国有徳の人づくり」としているんですけれども、もう少しかみ砕いて「才徳兼備の人づくり」と。

才というのは技術。柔道をするとか空手をするとかICTを使えるとか、様々な技術、技能ですね。これと人の徳を磨くということで、才徳兼備。これは「才徳兼備のリーダーシップ」という名著を誰か書いていましたな。そうか、矢野さんか。時事通信から出ていますけれども。

そういうことで、才徳兼備ということで、その「才」を磨く、その中の一つにICTが入ってきました。

一方、例えば今日、目の前に宮城先生がいらっしゃいますけれども、演劇なども才能を磨く重要なツールであるといいますか、舞台であると、人間形成にですね。様々な形で、このICTを使いつつ、才徳兼備の人づくりをどうするかということがございました。

それから、もう一つのテーマは、中学までは義務教育ですけれども、高校からは義務教育ではありません。ですから、藤井聡太君とか。このたび棋聖になりました。ああいう方は、もう中学のときから。あるいは、静岡県から卓球の平野美宇さんとか伊藤美誠さんとか、もうみんな中学のときから天才でしたね。そういう文武両道でやっている方がいらっしゃいます。ですから、高校からはもっと自由な選択ができるようにということで、高等学校の在り方も議論をするということをいたしました。

そういう色々な場面におきまして、子供たちが夢と希望をかなえられるようにするにはどうしたらいいかということで、前回の総合教育会議の議論を踏まえながら、今日新しく加わってもらった方々も含めて議論していくと。

ここの議論は、議論しっ放しではありません。ここの議論は、この総合教育会議に私が出て御紹介します。しかし、先ほど申しましたように、どこかへ偏見が入りかねませんので、総合教育会議には必ず、この委員会の委員長の矢野さん、もしくは副委員長の池上先生に出させていただいて、皆さんの議論を総括してお伝えいただくと。そして、それを教育委員会の方で議論していただいて、実践に移していくという形になっておりまして、この会議は極めて重要な会議であります。

こんなことをしているのは、恐らく47都道府県、さらに全国の自治体の中で静岡県だけあります。そうした中で、自薦、他薦、ほとんど他薦ですけれども、選ばれた方々が皆様でいらっしゃいますので、ぜひ充実した形で議論をしていただくようによろしくお願いを申し上げます。

少し長くなりましたけれども、新しく入られた方がいらっしゃいますので申し上げます次第でございます。どうぞよろしくお願いをいたします。

事務局： それでは、議事に入りたいと存じます。
ここからの議事進行につきましては、矢野委員長にお願いいたします。

矢野委員長： 皆さん、おはようございます。
4月から新しい体制で始まりましたが、こうして顔合わせするのは今日が初めてなんですね。
議論に入る前に、大分メンバーも替わりまして、新しく就任された方が何人もいらっしゃいますので、一言ずつ御挨拶をいただければありがたいと思います。
名簿を皆さんお持ちですね。50音順で上から参りましょう。
最初に、佐々木さんから一言お願いします。

佐々木委員： おはようございます。
はじめまして。中部電力静岡支店長を務めております佐々木と申します。
このたびは、実践委員会のメンバーとして招聘されましたこと、責任重大だと思ってこの席に座っております。これも、矢野さんとのちょっとしたえにしがありまして、こういったお声がけをいただいた。また、知事には日頃から非常にお世話になっているということもあって、私ここでは相当緊張して、この会議に臨んでおります。
中部電力の御紹介は、また後ほどということになるかと思いますが、私も、私はこの静岡に参りまして、実はかれこれ10年ぐらいの歴史を持っております。途中で3、4年、名古屋に一旦戻ってございましたけれども、これからもまだまだこの地でいろんな人たちに、企業に関わっていきたいと思っております。よろしくお願いいたします。

矢野委員長： ありがとうございます。
では、次に里見さん、お願いします。

里見委員： 静岡銀行で長らくお世話になりました里見和洋と申します。
現在は、全日本空手道連盟というところの東京オリンピック対策本部というところで、空手の競技が初めて今回オリンピックに登場するものですから、その裏方のお手伝いをさせていただいております。
教育の現場の経験というのは全くないんですけども、今まで生きてきまして、何か空手だとか社会人生活で感じたことが、お伝えできればいいかなと思っております。よろしくお願い申し上げます。

矢野委員長： ありがとうございます。
それでは、藤田さん、お願いします。

- 藤田(智)委員： 静岡県立大学の3年の藤田智尋です。よろしくお願ひします。
出身が藤枝市で、この実践委員会の中で唯一学生ということで、すごく緊張していて、ちゃんと皆さんと同じレベルで意見が言えるのかというのはすごい不安なんですけど、学生からの意見として発信できればいいなと思っています。お願ひします。
- 矢野委員長： どうぞよろしくお願ひいたします。
それでは、次に星野さん、お願ひします。
- 星野委員： お願ひします。今回、貴重な機会をいただきまして、誠にありがとうございます。
静岡県聖光学院中学校・高等学校で校長を務めております星野と申します。
私は教育の最前線にいるわけですがけれども、やはり子育てなら静岡だよねと他県から言われるような県になったらいいなと思って、日々奮闘しております。
公立、私立関係なくお互いの知恵を出し合って、英知を結集して、静岡の子育て文化をしっかりと醸成していきたいなというところを考えております。現場の生々しい意見もぜひ皆さんにお伝えできたらなと思っておりますので、よろしくお願ひします。
- 矢野委員長： どうぞよろしくお願ひします。
次に、松村さん、お願ひいたします。
- 松村委員： こんにちは。株式会社いちまるの松村と申します。
私、1人ですかね、会社の経営をしている者は。ということで、企業経営の視点から、教育現場は疎いんですけれども、意見を言わせていただきます。よろしくお願ひします。
- 矢野委員長： よろしくお願ひいたします。
次に、森谷さん、お願ひいたします。
- 森谷委員： 森谷明子と申します。よろしくお願ひいたします。
こちらの紹介の方に日本画家というふうに書いていただいたんですけども、あれこれ首を突っ込んでいて、今日はできれば、静岡ユネスコ協会の常任理事をしているのでそちらの立場からと、それから平成5年から断続的にですけれども、県内の高校の非常勤講師を現在まで続けております。したがって、先ほど生々しい現場の声と星野先生がおっしゃったんですけど、何かそういうこともお伝えしたく、あと大学生が2人、子供でおりますので、育児をしてきた母親の立場から、そんなところから今日お話しできたらなと思っております。よろしくお願ひいたします。

す。

矢野委員長： よろしくお願ひいたします。
それでは、山浦さん、お願ひします。

山浦委員： おはようございます。
磐田市から参加しておりますNPO法人キャリア教育研究所ドリームゲートの代表をしております山浦と申します。お願ひします。

矢野委員長： どうぞよろしくお願ひいたします。
今、ウェブを通じてですけれども、初めて顔を合わされた方も多いと思うんですが、これからこうした会議を通じまして、闊達に率直に生々しいお話も含めて、ぜひ御発言をいただければありがたいと思います。
それでは、私がこれから進行係を務めるわけですが、先ほど知事から、この実践委員会の成り立ち、そして総合教育会議との関係、大変御懇篤なお話があったわけでありまして、これまでの5年間、その前の検討委員会を含めまして6年間、どういう視点でやってきたかということをし御紹介させていただきたいと思います。前からの方は重複となり恐縮ですが、少しお時間を頂戴したいと思います。

まず、1つの考え方は小さく始めて大きく育てるという考え方です。要するに、各論から入るということですね。総論の大切さは分かりますけれど、各論がありませんと物事は変わることはありません。改革というのは各論から始まる。

スティーブ・ジョブズという例のアップルの実業家がいますけれども、彼が言った言葉で「神は細部に宿る」という言葉を言って、大変感銘を与えたんですね。もともと言い出した人はどなたか知りませんが、要するに、総論ではなくて、本当に何げない小さなこと、しかも重要なこと、そこに神様は宿っているという信念で事業をやった人なんですね。神という言葉を実理と言い換えてもいいですし、正しい答えと言ってもいいと思います。そういうところで、色々皆さんの御経験とか見識に基づいて、いろんな意見を出して、それがだんだん大きくなっていくと全体が変わっていくんだと思います。

総論というのは一種の羅針盤みたいなものですから、この実践委員会で教育改革をやろうということも、言ってみれば富国有徳の国づくりという県の大方針がありますね。先ほど、知事がお話になった才徳兼備の人づくり、そういう方向性が決まっているわけでありまして、それを実現するにはどうしたらいいかということで、ぜひ皆さんのお知恵を出していただきたいと思います。それを総合教育会議にかけようと思っております。

それから、もう一つは、この実践委員会でやっていることというのは非常に幅が広いんですね。幼児教育から始まって、小、中、高、大、大

学院、そこで終わらなくて社会人教育、そこまで皆さんに意見をお尋ねしております。結局、どういう考え方かといいますと、生涯学習という言葉はよく使われていますし、ある意味では教育に携わる人の常識になっていると思うんですが、それに応えるような生涯教育の場をつくっていくと、そういう静岡県にしたいという思いで今日まで来ているわけでございます。

社会人になっても、もう一遍人生やり直そうという人がいるときに教育の場があるかどうか。学校教育、特に義務教育の場合は皆さんが学校に行くのは義務ですからいいんですけどね。高校以上は、ある程度本人の自由意志というのが働いてくるわけなので、そういうものに常に応えられるような教育の場をつくっていかう、こういうことで取り組んできているわけでございます。

小さなことから始めて大きくする。生涯教育の場をつくる。これまで5、6年の間に随分いろんな事例が生まれました。これは皆さんのお知恵の結晶であります。

そして、今年からは小委員会をつくって、いろんな具体的なテーマについて、しっかりもんで本委員会にかけていただくというように小委員会をつくりました。それについて、委員長はこの実践委員会の副委員長であります池上先生をお願いしているわけですね。池上先生から、小委員会の活動状況について、ちょっと御紹介いただけるとありがたいと思います。

池上副委員長： 副委員長を務めております池上です。

それでは、ごく簡単に3分ぐらいの時間でお話ししたいと思います。

この委員会の下部組織として、才徳兼備の人づくり小委員会というのを今年度立ち上げました。こちらの実践委員会は、かなり各方面からたくさんの方々がいらっしゃるので、小委員会はうんと絞り込んで、私を含めて5名の委員で進めることにしました。

ジェンダーバランスにおいても、男性3名、女性2名、年代にしても30代から恐らく60代かなというくらいまでで、また県の東部、西部、中部のバランスがよくなるようにと配慮をして人選をいたしました。

こういう委員会は、私のようないわゆる学識経験者が多くなりがちなんですが、大学関係は3人、女性の委員の方はそれぞれ民間団体や企業の経営などをなさっているということで、いずれにしても現場で、広い意味での教育に携わっている方々です。

これまで2回行いました。

第1回は5月26日、まだコロナの影響がどうなるか分からない状況でしたので、ウェブでつないで、オンラインのZoomの会議で行いました。

これは、まず皆さん、はじめましての皆さんだったので、それぞれがどういう活動をしていて、どういう背景の下にこの小委員会にコミット

するかを表明し合うという会でした。それぞれの御研究や活動の背景から、しかしながら自ずと、特に高校教育の在り方をめぐる課題というのに議論が収れんしていったという印象を持ちました。

それを踏まえて、第2回が7月13日。これは対面で行いました。

この回は、進行を担当した私が言うのも何なんですけども、非常にエキサイティングな機会で、皆さんの発言がちょうどサッカーでいうとボールがパスされながらゴールへ向かって突き進んでいくような、そういう非常に知的な刺激を受けた会議になりました。

詳細はともかく、幾つかの重要なキーワードが出てまいりました。

大きく3つ上げると、1つは地域との連携ということ。これは、高等学校においても地域との関わりの中で生徒たちの学びが非常に豊かになっていくということについて確認をしました。

また、探究活動。一方的に知識を得る、インプットしたものを間違いなく出すという旧来型の勉強ではなくて、今はアクティブ・ラーニングなどと言ったりしますけれども、探究的な活動を通じて、生徒たちの知的好奇心に火がつくということ。これが2つ目。

そして、それらをつなぐ、いわばツールの部分としてICTの重要性というのが確認されました。

第3回が実は週明け、来週9月28日、これも県庁で対面で行います。来週9月28日については、第2回で出てきた方向性をさらに深掘りしていくということを考えています。

実は、第2回の中で結構委員の発言は過激というか、ラジカルな方面にも及びました。例えば、高校を本気で変えるんだったら、高校の先生方、とりわけ管理職の校長先生の在任期間をもっと長くしないと難しいんじゃないかとか。あるいは、先生方の評価の体系についても踏み込まないと、なかなか本気で地域と関わっていくというのは、そういう学びを構築するには至らないんじゃないかというような御意見などもいただきました。また、民間の活動をされている方々からは、私自身は目からうろこのような視点もあって、ぜひ来週はそれを深めていきたいと考えています。

また、10月29日には、高校現場の視察ということで県西部の2つの高校、県立の高校と私立ですけども、地域と関わった非常に興味深い活動をしている高校2つを委員として視察していくというふうに考えております。

現状、小委員会について、以上報告でした。

矢野委員長： どうもありがとうございました。

これから機会あるごとに、進行状況なり御意見なりを賜るように、そしてそれを実践委員会で皆さんの意見を聞きながら、総合教育会議へ反映して参りたいと思います。よろしく願いいたします。

それでは、第1回総合教育会議の様相について、私から報告を申し上

げます。

7月29日に会議が開かれまして、実践委員会を代表して参加いたしました次第です。

冒頭は、知事と教育長から才徳兼備の人づくりの必要性について強調されまして、私ども実践委員会の者としては、大変それを心強く思った次第であります。

さて、議事の内容ですが、お手元の資料を御参照いただきたいです。資料の1ページ、資料1-1と書いてあるものです。これの開催結果を御覧ください。

4の議事にありますとおり、ICTと高等学校教育の在り方、これは問題提起ですが、これについて意見交換をいたしました。

ICTに関する論点、あるいは高等学校教育の論点は、後ほど3ページ以下に書いてありますけれども、内容は書面で開催したこの実践委員会でお示しした資料と同じです。委員の皆様からいただいた御意見については、取りまとめて総合教育会議に提出しておりますが、これも添付のとおりであります。これらの資料を基に、私から実践委員会に意見を申し上げました。

1ページの項目5、出席者発言要旨というのがありますが、そこに書かれているのが総合教育会議の御意見の様式であります。

まず、ICTの関係でかいつまんで申し上げますと、人は人が育てるので対面での教育が大事。聞く力を高めることが大事であり、人間形成の第一歩である。

日本のICT教育は遅れているので、新型コロナウイルスの影響を契機にスピード感を持って計画的に取り組むことが必要である。

あるいは、ICT教育を進める上では、情操教育との両立が不可欠である。

貧困家庭のサポートが不十分だったことがICT導入を一気に進められなかった要因の一つであり、地域総出できめ細かな支援をしていく時期である。

あるいは、全県レベルで組織的に教材を準備していくことが必要である。

ICTは、空間を移動せずに同時双方向でできるメリットがあるので、活用方法を広げていくべきである。これはなかなか、言われている議論でありますけれども、教育の現場でこれを教育委員の方から発言があったのは大変意味があると思います。空間の距離が消えうせるということですね。つまり、集まらなくても話が通ずるということです。集まらないと、やっぱり人と人との交流ができませんけれども、知識あるいは大方の部分でリモートの教育、あるいは学習ができるということでもあります。これはICTのところで出た意見ですけれども、今後教育現場のいろいろな改革について役に立つヒントではないかと思います。

次のページになりますけれども、ICTにより学習者のモニタリング

や授業の分析がやりやすくなり、授業の改善につなげていくことが可能である。

I C T教育の推進のために専門部署を設置し、集中して進める体制を目指してほしい。

教員志望者をどのように教育し、教員採用の際にI C Tの知識や経験をどのように確認するかということも必要だと。やはり、志望者はもちろんですけれども、先生自体のI C T教育、先生に対するI C T教育というのが必要だということでもあります。

それから、高等学校教育の在り方に関する意見としましては、高校生が活躍する将来のニーズに応じていくために望ましい高校という図式で課題を検討してほしい。

全ての高校がアピールできる特色を持てるような体制を目指せたらすばらしい。

静岡県に全寮制のインターナショナルスクールがあると、大きな広がりにつながる。

地域に貢献していく生徒を高校が支援していくという考え方が必要である。

皆で学び取りながら、生徒が自分の進む方向を自主的に決めていけるような環境に高校が変わっていくと面白い。

高等学校の在り方に関する議論は、すぐやることと5年ぐらい先に目指すことをはっきりさせて議論すればよい。

演劇科については、演劇系のことを行っている学校でカリキュラムを組み替えて、S P A Cの先生を入れる形であれば少しずつ進められる気がする。演劇科の設置については、総合教育会議でも一度結論が出て、やろうという方向性は確認されたわけです。先生は、宮城さんをはじめ、S P A C、日本最高の講師陣がいるから何の心配もないでしょうと私は言っておきました。

それから、教育、芸術、文化は多様性をどう尊重していくかを常に念頭に置いて考えていくことが必要であるといった意見がございました。

会議全体を通じて、教育委員会の皆様に実践委員からの意見を受け止めていただいて、大きな同じ方向を共有することができたというふうに私は思っております。

会議では、知事からの総括が、ここにも第6項に記載したとおりですが、やはりいろいろ具体化をして、それを進めていくということが大事だということがございます。演劇科についても、今後総合教育会議で意見を聞いて参りましょうというようなお話をいただきました。

これが第1回総合教育会議の報告の概要でございます。

大変はしょって御説明をいたしました。この中でI C Tを活用した教育の推進については、この意見を受けて動き出している取組がありますので、事務局から説明をお願いします。

事務局： それでは、事務局から御説明いたします。
総合教育課長の縣と申します。よろしくお願ひいたします。
資料は14ページになります。資料1－2という資料になります。
この資料は、7月29日の第1回総合教育会議でいただきました御意見と、その後、教育委員会で検討した対応を一覧にまとめたものでございます。
左側に大まかな意見の分類と要約、中央の列に意見への対応、右側に長期的な方向性を記載しております。
意見への対応と長期的な方向性につきましては、表の上段、太枠で囲んだ行に総括的にまとめておりまして、この後で御説明いたしますICT教育戦略室において、全ての取組を推進していくこととしております。
右上部に記載しております学校教育情報化推進計画の策定につきましては、昨年度公布されました学校教育の情報化の推進に関する法律の第9条によりまして、都道府県の努力義務とされておりますので、今後この表にお示しした施策を取りまとめまして、計画として公表する予定となっております。
次に、15ページを御覧ください。
ICT教育戦略室の設置でございます。
先ほども矢野委員長から御報告がありましたように、総合教育会議におきまして、ICT教育の推進のため、教育委員会の中に専門部署を設置し、集中して進める体制を目指すべきという御意見がありました。
この意見を踏まえまして、教育委員会におきまして、関係課等によるICT教育戦略室を8月に設置いたしまして、ICT教育に関する施策を一体的かつ強力に推進することといたしました。
1の「室の構成及び役割分担」にありますように、教育委員会の教育政策課、ICT教育推進室、総合教育センターが一体となりまして、関係課とも連携を図りながらICT教育に関する施策を確実に進めていくこととしております。
取組を進めるに当たりましては、アドバイザーを委嘱することとしておりまして、資料では人選中と記載しておりますけれども、県ICT戦略顧問の池田哲夫氏に加えまして、静岡大学情報学部情報科学科助教の遠山紗矢香氏から助言をいただくことを予定しております。
取組内容といたしましては、2の取組事項にありますように、人材育成の更なる充実に加えまして、オンデマンド学習や電子教材、オンライン学習、学習管理システムなど、ICT活用の様々な場면을整理した上で戦略的に取組を進めていくこととしております。
共通事項にあります教員支援ポータルサイトの設置、回線の増強や追加、③にありますZoom・カメラ等の整備については既に実施しておりますし、④にありますAI教材の実証につきましても、実施校を指定済みでございます。

各校で作成した教材につきましては、特に著作権に留意しながら、共有に向けた準備を進めているところでございます。

児童・生徒に個別最適化された学びを効果的・効率的に実現するために、今後もインフラの増強をはじめとした学校のICT環境の充実に取り組んでいくこととしております。

説明は以上でございます。

矢野委員長： ありがとうございます。
今後のICT教育戦略室の活動に大きく期待をしたいと思います。
今までのところで、皆様からどうぞ自由に御意見や御質問があれば、御発言いただきたいと思っております。
画面の都合もありますので、御発言される方は挙手をしていただきたいと思っております。その上で御発言をお願いします。
池上先生、どうぞ。

池上副委員長： 度々すみません、池上です。
今のICTのことについて、一言コメントしたいと思います。
実は先日、掛川西高校のオンライン模擬授業というのに、私たち静岡文化芸術大学の教員として関わりました。本学にとっても、オンラインで模擬授業をするというのは初めて、また先方の掛川西高校においてもオンラインで全国の大学と結んで模擬授業を行うというのは初めてということでした。

申し上げたいのは、県内にも非常に先駆的な取組をしている高校もあって、その中でも推進役となっている先生方がいます。ただ、伺ってみると、そういった先生方の県内の横のネットワークというのはあまり十分にはできていないんだということでした。

実は私、この小委員会のこともあって、今回掛川西高校でのオンライン授業の前に一度掛川西高校に足を運んで、ICTの推進の先生と1時間ほどでしたけれども、話をする機会を持ちました。その中で、先生方の中でICTのスキルや、あるいはその必要性についての認識、さらにそれを教育実践に反映させていくというあたりの志向性というものに、かなり差があるということを率直に伺いました。一方で、やってみて大きな効果があるという認識も共有されたし、この方向が決して間違っていないという理解ができたと思いました。

けれども、先ほど申し上げたように、ではみんながみんな一気に用意ドンでICTを使って、生徒の多様性に配慮した、個々に配慮した教育ができるかということ、まだそこまでは随分距離があるので、まずは県内でそういうノウハウを持っていて、いろんな挑戦をしている先生方をうまくつないでいくような、それこそICTでつないでいくような、そんなやり方も方法なのかなと思っております。

今、非常に機運が高まっているので、このタイミングを逃すことなく

集中的に取り組むべき項目だと理解しています。

以上です。ありがとうございました。

矢野委員長： ありがとうございました。
 他にはいかがでしょうか。
 クリスティーヌさん。

クリスティーヌ委員： 私もICT教育についてですが、このICTというのは何の頭文字なのか、どのような意味だか分からない方もいらっしゃると思うんです。

 というのは、私たちもたくさんの頭文字言葉で動いているところがある中で、私たちみんなICT教育の中で生活をしているわけなんですけれども、ではICTって何なのと。情報とテクノロジーが融合することによって、Information and Technologyということなんですけれども、学生さんたちの方が先生方よりICTに長けているわけなんです。

 それで、学校の中で生徒さんたちに携帯電話を使わないでくださいという先生方もたくさんいらっしゃって、でも使っている学生さんたちが持っているノウハウとか知識というものを教室の中で生かすことによって、もっと早くにそういうものに精通できるようになるわけですので、そういうテクノロジーというものを学生の方から逆にリーダーシップを取っていただいて、先生方に対して使い方や情報を提供してもらような、逆教育ではないですけれども、やはり引き出す、エデュケートというのは、ラテン語でeducare（エデュカーレ）という引き出していくということが教育であるのならば、学生たちをもっと活用した形でのもの、そして新しい、必要とされているようなアプリとかいろんなテクノロジーというものは、何が何だか分かるようになると、やはりアイデアでほんとひらめくわけなんです。それが科学の進歩でもあるわけですので、そういう機会をもっとたくさん学生さんたちに私は与えてほしいと思いますので、むしろ設備とかそういうものを全部セットするだけではなく、設備に予算が回らない地域もあつたり、学校もあつたり、教室もあるわけですから、そこのところはもうちょっと工夫した形で、そこにいる学生さんたちの中から上手に引き出して、彼らが指導者というか、先生方になってくれるような何か仕組みというものもこれに足していただけると、より早くICTに精通できる県になるのではないかと思います。

矢野委員長： ありがとうございました。
 まさに道具としてのICT、あるいは双方向としての機能というようなことだと思います。
 星野先生、お願いします。

星野委員： お願いします。

本校は、3月2日の全国一斉休校のときから、実はオンラインでの授業というのを実現しました。

非常に残念なのが、まさに先生方もおっしゃられているとおり、静岡というのは横のつながりが非常に苦手だなということを痛感しています。

実は、今県外からの視察が非常に多くて、視察も来てもらおうと困るので、オンラインでこちらがノウハウを提供している。これは、私立、公立、教育委員会限らず、海外からもそういった情報収集に本校が活用されているというところです。実は、あさって土曜日、17時から本校が持っているノウハウというのをオンライン上で公表するという機会をつくっております。あまりにそういったところで、私立だからお金があるからできるんだろうとか、そういうステレオタイプ的な評価でじくじたる思いをしておりました。ところが、全国ネットとか共同通信で発信されて、静岡県外の人々の興味が非常にあるということです。

実際に私学だからお金があるとか、全然そんなことはなくて、何度も保護者会を開いて、タブレットを購入していただいています、6万円です。これも非常に説得するのに時間をかけました、3年前ですね。

教室の環境としては、プロジェクターとスクリーンを、改修工事をして設置してあります。その環境で3月2日からスタートしました。

実際、教職員では、年配の先生に対して若い先生が指導役としてマンツーマンで2日間研修しました。最初、年配の先生は、タブレットで写真を撮るところからスタートして、その翌週にはもう授業を展開できるということです。皆さんが思っているよりも全然簡単にできるというのが実態です。LINEでもテレビ電話はできますので、そういったところがあります。

今は、1割の県外の生徒が来られておりませんので、県外の生徒も結びつけられるようにということで、業者と共同開発で、公立学校でも実現できるように、極めて安価な形で教室とオンラインの状況をより結ぶというところで、カメラとモニターを新たに設置しました、1教室20万円以下で。そうでないと公立とかにも広げられないということで、その工事改修も終わらして、その発表会も兼ねて、あさってそういうことをやるんですけども、実はそういう動きをしております。

いろんな勉強会でも掛西の先生が参加されたりしているんですけども、今、公立の学校では、そういう若い先生が孤立している状態にあると思います。どこかでブレーキが必ずかかっていると。それをどうやってピックアップしていくかということが非常に重要な一方、私も実はメカはあまり詳しくないんですけども、極めて簡単にできるというところで、そのハード整備というところをぜひ前向きに検討していただけたらと思います。

結局、私どもが独り勝ちしていても駄目で、ICTというのはいろんな人が使うことによって、新たなテクノロジーがどんどん出てくるとい

う状態になっておりますので、ぜひそういったところで、また御理解と御協力いただけたらというふうに思っています。

すみません、長くなりまして。以上です。

矢野委員長： ありがとうございます。
加藤さん、どうぞ。

加藤委員： 皆さん、こんにちは。

私、サマースクールを毎年、リーダー育成の塾をやっているんですけども、今年は残念ながらリモートで、しかも夏休みがすごい少なかったものですから、全国の高校生たちが最大公約数で休みだった5日間、その後、毎週日曜日、そして一昨日まで2か月間かけてやりました。

特に、うちはディスカッションというのを中心にやっているものから、果たしてその2か月間かけてアジア・ハイスクール・サミットで、ポストコロナの社会変革を高校生がいかにか起こせるのかという題でやったんですけども、できるのかなとものすごく不安だったんですが、一昨日、この発表会をやって、それは吹き飛びました。

結構、この2か月間の間、画面に向かってなかなか意見がまとまらなくて、泣いたりおめいたり、そういうようなこともリアルに会っているときとほぼほぼ同じようでしたし、何せこんなことをこの場で言うのもなんなんですが、リモートでカップルも生まれちゃったりなんかして。高校生たちはすごいなと思ったんですが、やっぱり理想的な学校の在り方だったり、それからいろんな分野で話し合いをして、最後はパワポにみんな20枚ぐらいまとめて発表会もしました。

それと、先生方でもすごい工夫をしてくださって、逆に画面が目の前に現れるもんですから、高校生たちは集中して聞いたというところもあると思うんですね。

それともう一つ、さっき空間がというお話がありましたけれども、まさにそのとおりで、マレーシアのマハティール前首相と、リーダー塾だけじゃなくて、せっかくだからもったいないので、日本に来ることになって、実は4月から来られない、日本政府の高校生の奨学金で来ることになっている1年から2年、アジア架け橋の20か国、200人の高校生のうち150人が参加して、それでマハティールさんにポストコロナ後の次世代のリーダーの在り方みたいなものを講義をいただいた上で、かなり各国からいろんな質問が出て、英語で全部やったんですけども、日本人の子たちは、基本母国語が多くて、英語がしゃべれないという子も多かったんですけども、逆にそれが発奮となって、これから英語を勉強しないと世界では通用しないんだということが分かったというような意見も最後の日に出まして、逆にそういう世界とつながるという意味においては、もちろんリアルに留学生が学校に来ることの方がよっぽど私はいいと思いますけれども、それと同時に、留学生をつないで教育できて

きたのに、一瞬にして世界中の子供たちとコラボしているんなことができるんですね。

ですから、このICTというのは、逆に広がりを持たせるということで、iPad一つあればできるわけですから、そういう支援をぜひ県の方でさせていただきたいなということを強くお願いしたいというふうに思います。失礼しました。

矢野委員長： ありがとうございます。

新しい世界が開けていくような気がしますね、今のお話を伺っておりますと。大変有益なお話で、ありがとうございます。

ところで、大学生でなかなか学校に行くのも大変だったのではないかなと思うんですけど、藤田さん、どうですか。ICTをどのように使ってやっておられるのか、お話があればお願いします。

藤田（智）委員： 私は、前期がオンライン授業で、ずっと家から授業を受けていたんですけど、自分で今回タブレットを買って、タブレットを使いながら授業をしていたんですけど、授業内で配付するプリントとか資料がすごく多くて、それを家のコピー機も使えない状況で、コンビニとかにプリントしに行くのも結構お金がかかっていたり、面倒だったりしていたという理由もあって、タブレットを使ったんですけども、それがすごい使いやすく、資料とかもすごくまとめやすいし、どこに何があるのかというのがすごく分かりやすく、これは対面授業が始まってからもタブレットをノートとか資料代わりにして使うのもすごくいいなというふうに、使ってみて思いました。

今まであった意見の中に、生徒の方がソフトやタブレットを使う技術は優れているんじゃないかという意見があったと思うんですけど、確かにそうなんじゃないかなと思っていて、やはり私は中学のときから携帯とかパソコンとかに触れていたんですけど、今の高校生、中学生、小学校とか、早ければ小学校より前のときからずっとそういう周辺機器に触れて生活してきたので、使い方はすごく分かっていると思うんですけど、多分使い方については問題がないと思うんですけど、SNSとかインターネットを使っていく中での情操教育とか、SNSとか不特定多数の人が見ているところで個人情報を発信してしまったり、そういう恐れやリスクとかというのは必ずあると思うので、機器の使い方というよりは、そういう情操教育の方に力を入れていったらいいんじゃないかなというふうに思いました。

矢野委員長： ありがとうございます。

今日は、本当は時間割からいうと、次の議題をやるんですけど、このICTの問題は、色々皆さんそれぞれの分野で実際に大変革を遂げつつあるというのを実感しますので、もう少し時間をかけたいと思うんで

す。

ビジネスの世界ではどうでしょうか。

松村さん、どうぞ。

松 村 委 員： 企業も大変遅れておりました、デジタルの世界に入るということで、昨年から社内にICT推進プロジェクトをつくって進めようと思っておりましたが、なかなか議論しているだけだったんですが、コロナという風が吹いて、これはやらざるを得ないということで、各地の営業所を通じてリモートでコミュニケーションしたりとか、今までもまだやり切れていなかったんですけれども、経営会議をペーパーレスにしたりとか、それから社内においては、ある意味の風土がまだまだそこまで行っていなかったということで、風土づくりのために、現在私自身もあまり得手ではないんですけど、社員向けのツイッターをしょっちゅうやっております。そうすると、パートの方々を含めて、私とのコミュニケーションにうまくいったりとかしまして、やはり組織そのものの風土をつくるというのが大事かなというふうに思っていました。

才徳兼備の中では、皆さんおっしゃるように、ICTは推進しなければいけませんけれども、やはりそれは「才」の部分ですから、「徳」の部分で何を誰が学ぶかというのが大事だと思います。それは並行してやっていくべきかなと思っております。

県につきましては、こうして既にICT教育戦略室をつくられて進んでいらっしゃるということで、本当にスピードを持ってやっていただいているということで感謝しております。以上です。

矢 野 委 員 長： ありがとうございます。

スポーツの分野ではどうでしょうか。

山 本 委 員： 山本です。

サッカーの部分でいうと、サッカー協会は出社も20%に限られていまして、あとFIFA（国際サッカー連盟）とアジアサッカー連盟とかと常にやり取りして、日程の調整をしなければいけないので、ほとんどZoomの会議で、僕もリモート会議とか全くできないほうでしたけど、普通にこなせるようになりました。毎日、家でリモート会議をやっています。あと、こういうパソコンにも来るんですけど、携帯で例えばテクニカルレポートというような形で指導者向けに。登録している会費を払っている指導者は8万人、10万人ぐらいいるんですけども、その人たちに、その代表活動の選手の映像とかを撮ったものを一斉に流して、パソコンでも見られます。指導者がこれですぐに勉強できるようなシステムとか、テクニカルニュースというような形で日々流れていまして、我々は代表選手を抱えているので、代表選手はもうヨーロッパでリーグが始まっています。ほとんどがヨーロッパでプレーしているんで、その

子たちの代表のプレー集は、すぐに次の日の朝には我々のところにはデータが出て、その見たい選手のところをクリックすれば、その子の映像がぴゅっと出てきます。フルタイムも見られるし、ハイライトも見られるようになっていまして、それをやるスタッフがいるということと、世界と戦っているのも、リモートとか情報発信とか情報共有とかというところで、その辺りのリモート系のことはかなり進んでいるんじゃないかなというふうに思います。

ワンタップといって、選手のコンディションもこれで、毎朝簡単に体温、今日のコンディション、喉が痛くないかというのは、毎日入れないといけないんですけど、入れて、コントロールされて、誰が今調子が悪いよとかというのはメディカルの方に行きまして、それで問題のある選手は、監督、コーチ、スタッフに一斉に展開されるというような、非常に見るものが多過ぎて困るぐらいリモート化が進んでいると思っております。

矢野委員長：　　すごく進んでいるんですね。大変びっくりしました。
里見さん、どうですか、空手の世界は。

里見委員：　　サッカーと比べますと、大分次元も違うんですけど、やはりリモートは進んでいますね。

世界連盟とのやり取り等もせざるを得ないということと、それからオリンピックに向けてポイントの進捗状況等々、全部リモートでやっております。この私が空手のメンバーの中でオンラインの会議ができるようになりましたので、やはり必要に迫られれば何とかできるようになるんだなというふうに思っています。以上です。

矢野委員長：　　分かりました。
宮城さん、演劇の世界はどうですか。

宮城委員：　　実は、SPACは8月から9月にかけてフランス人やスイス人が演出する作品の稽古をしなくちゃいけなかったんです。ところが、渡航が今、基本的に禁止されてしまっているのも、それはそれで何とかしてほしいという訴えはしていますけれども、リモートで稽古を始めるしかないということになって、2つの作品両方ともリモートでの稽古になりました。リモートといっても、俳優は静岡の稽古場にいるわけですけども、演出家はスイスにいたり、フランスにいたり、Zoomで時差があるので、ちょっとそこは、向こうはものすごく朝早くに稽古してもらわなくちゃいけないんですけど、ところが思った以上にこの稽古がはかどるといえるのか、これは不思議ですね。でも、言葉が違う人間が何とかコミュニケーションを取ろうとするときと同じで、たどたどしいだけに、一生懸命そこから情報を酌み取ろうと、お互いがそうしているんですよ。

ね。本当にその演出家の言うことに一生懸命耳を、これはつまりどういうことを言っているんだというのをものすごく想像力を働かせながら聞いているし、演出家の側もZoomの画面から見ている稽古から、ものすごく自分の想像力を、頭を使って、きっと今はこういうことなんだろうと。ですから、一種の共感みたいなものが形成されることはできる。

ただ、これは恐らくある程度の共有基盤があるから、想像力を働かせれば共有できるんであって、演劇の現場は身体的な共有というのが前提になっている。ところが、全く初めての人とか、あるいは身体的な共有がない人同士で、今申し上げたようなことが、共感が可能なのかというと、そこは多分難しい。つまり、Zoomによって分断というのが進行している感じも一方です。つまり分断というのは、これは分かるよね、分かるよね、共有できるよね、うんうん、できるできるという人たちだけがつながってしまって、そこの前提がない人とは、ちょっと話せないな、Zoomじゃちょっと出会えないなとなってしまうんじゃないかな。そこに僕は危惧をしているところです。

それから、すみません、もう一つ。子供たち向けの子供大会とかスクールも、やっぱり別の学校の子たちと一緒に集まるのが難しいということで、リモートでやってみました。このとき、一番僕がつらいと思ったのは、その子その子の家庭の経済力というんでしょうか。つまりインターネット環境が随分違うということですね。ここは何とか、これは意見にもありましたけれども、最低限のインターネット環境はどこのうちの子にも共有されているというふうにしていただきたいなとすごく思いました。以上です。

矢野委員長： ありがとうございました。
 広く教育改革という点でも大変示唆に富んだお話だったと思います。
 このテーマがそろそろ終わろうかなと思っているんですけど、もうお1人か2人、御意見があったら、どなたか出していただけますでしょうか。

 では、藤田さんと佐々木さん、その順番でお願いします。

藤田（尚）委員： 皆様、こんにちは。なすびの藤田でございます。
 このICTなんですけれども、このコロナをきっかけに今年をICT元年だとするのであれば、やはりこれから皆さん、取りあえずいろんなものをICTに当て込んで使ってみようというということで、どんどんICTに挑戦をしていると思うんですけれども、ただ、そこには同じような問題が同時に同じ量だけ生まれてくると思うんですね。

 例えば音楽でいったら、ここで音楽を学ぶ、でも実際にオーケストラになると、そこにいる調和があって初めて一つの曲が奏でられているのに、無理やりこの中で人を集めて、それぞれの楽器を奏でようとすると、やはりリアルにはかなわないということとか、いろんな問題がこれ

から発生してくると思うので、全てICTで済ませようとするのではなく、やはり問題点もしっかり見極めて、PDCAサイクルを回していくべきなんじゃないかなというふうに私は思います。

特に当社の場合は、ビジネスの観点からいっても、コトよりもモノを動かしている会社ですので、情報とかはICTとかを使えば十分に、リモートを使えば十分に得られることはできるんですけど、やはりモノを動かすとなると、そこにはリアルが発生してくるわけで、そのうまい融合というのがこれから大事になってくるのかなというふうに思っております。

これを教育に当てはめると、覚えたり勉強するものはICTでいいかもしれないですけども、やはり学校生活の中で大事な友人との関わりであったりとかというのはリアルが大事で、それも何でもかんでもICTに持っていくのではなく、これはICT、こっちは実際のリアルでということをしみ分けをして進めていくということが私は大事かなというふうに思いましたので、御意見をさせていただきました。

矢野委員長： ありがとうございました。
 では、佐々木さん、お願いします。

佐々木委員： 今の藤田さんの意見に近いんですけども、やはり我々もこうやってリモートを随分会議でこなしてきましたけれども、やればできちゃうんですね。やればできちゃうと、一体何が職場という場に残っているんだろうというようなことを非常に考えさせられるわけです。

これは学校も同じ問題を抱えるんだろうなというふうに思うんですけども、やはりそういうICTの環境を整え、海外ともつながり、いつでも好きな授業を自分でオンデマンドでも聞けるようになるというようなことが実現してくると、学校という場は一体どういう価値を提供するところになるんだろうということは、これから先生も含めて、その場の在り方というのを変えていかなきゃいけないのかなという気もするし、これはいいチャンスでもあるかもしれないというふうに思います。

先ほど、松村さんがおっしゃったように、徳育もそうですけれども、社会で一番必要となるような課題解決力ですとか、そういった力を養うために、顔を突き合わせて、その空気という場の中で何かを一緒に学んでいくということが必要なことになってくるんじゃないかというようなことも感じます。

ですので、先生の在り方だとか、学校の在り方ということについても並行してみんなで議論していくべきところじゃないかなという気はします。以上です。

矢野委員長： ありがとうございました。
 このICTの活用の問題というのは、今回の議論で終わるはずのもの

ではないと思っています。一応テーマは毎回総合教育会議でも決まっておりますけれども、またその都度、実践委員会の意見としていろいろ申し上げる機会があると思います。取りあえず、今日はここで議論を打ち切りますけれども、大変有意義な、教育現場というのと、それを越えた社会全体の動きというものがよく分かるお話ではなかったかと思えます。どうもありがとうございました。

では、本日のテーマは「誰もが夢と希望を持ち社会の担い手となる教育の推進」ということでもあります。

まずは、資料について事務局から説明をお願いします。

事務局： それでは、事務局から御説明いたします。

資料は、16ページになります。資料2でございます。

本日の協議事項「誰もが夢と希望を持ち社会の担い手となる教育の推進」でございます。

いじめや不登校というのは、増加傾向にございます。それから、経済的、社会的な事情を抱える子供たち、あるいは特別な支援を必要とする子供たちもおります。こうした子供たちをどのように支援する、どのように課題に取り組むべきかということについて御意見をいただきたいと思えますけれども、論点につきましては2つに分けてございます。

1つ目の論点は、子供たちが生き生きと学べる環境の整備としております。いじめや不登校といった問題を解決していく。それから経済的、社会的な事情を抱える子供たちが等しく教育を受けられるようにしていくために具体的にどのような取組が考えられるか御意見をいただきたいと思えます。

2つ目の論点は、特別な支援を必要とする子供たちを育む教育の充実と地域全体で成長を支える活動の促進としております。特別な支援を必要とする子供たち一人一人のニーズに応じた教育を充実していく。それから、個々の可能性を最大限に伸ばしていくために、具体的にどのようなことが考えられるか御意見をいただきたいと思えます。

いずれの論点につきましても、それぞれに記載しております検討の視点も踏まえながら御意見をいただければと思えます。

続きまして、17ページでございます。資料3でございます。

こちらは、論点1に関して、現状ですとか県の取組等についてポイントをまとめたものとなっております。時間の関係がございましたので、中身の細かい説明は割愛をさせていただきますけれども、この後、22ページからの資料4が論点2に関して現状や県の取組等についてポイントをまとめたものとなっております。

この資料の中で、別冊の参考資料の関連ページも記載しております。それから、お手元にリーフレット等もお配りしておりますので、適宜御参照いただければと思えます。

一つ、不登校の対策について、具体的なイメージを持っていただくた

めに、具体的な事例を御紹介したいと思います。本日の資料としてお配りしておりますリーフレット「子供たちの笑顔のために、不登校の現状と対策」というものをお配りしておりますので、こちらを御覧いただきたいと思います。リーフレットでございます。

開いていただきまして、3ページと4ページを御覧いただきたいと思います。沼津市と袋井市における取組事例を掲載しておりますが、子供の生活実態を踏まえたトレーニングや支援、それから家庭との情報交換や登校支援、それから家庭訪問や学習支援などを行っております。こうした取組を通じまして、下段の①から③にありますように、子供たちの具体的な変化につながっているところでございます。

こうした事例も参考にしていただきながら、御意見を賜ればと思っております。

事務局からの説明は以上でございます。

矢野委員長： ありがとうございます。

いじめ、不登校、それから特別支援、こういった課題について、論点1、論点2と分かれておりますけれども、それにこだわらずに自由に御意見を出していただきたいと思います。

片野さん、お願いします。

片野委員： 函南町で酪農を営んでおります片野と申します。よろしく申し上げます。

まず初めに、ICTのところで話すまでもないと思ひまして手を挙げなかったのですけれども、このリモートでの会議の弊害というのが、またこの会議でも表れていまして、いつもでしたら、この目の前にある花の説明を1枚出されていまして、それでどれが浜松の花で、どこが菊川の花でというふうに丁寧な説明書きとともに添えられていましたが、今回はそのようなものもなく、Zoomで参加されている方は、この花をよく見られるのかというふうなことで、私自身がZoomの方に代わってよくよく今までずっと見ていたのですけれども、関係者の方々も大変思慮をなされて、この紙を出さないという方針を決めたものだと思いますけれども、こういうところも含めて何か改善ができたならばなというふうに農家として思う次第であります。

話がそれてしまいましたけれども、私自身が思ういじめの問題、これは、本当に尽きぬ問題だと認識しております。

その中で、私自身も学校から渡されたアンケートが今思い出されるのですけれども、いじめられているか、いじめられていないかとか、いじめを見たとか、そういうのを定期的に行った記憶もございます。いじめている側の不幸、そしていじめられている側の不幸、両方の不幸があるわけですね。そういう中で、なかなか先生と生徒のコミュニケーションの中でも新米の先生もいればベテランの先生もいて、気づいたり気づか

なかったりするわけですが、このアンケートをどのように今扱われているのかということが少し気になっていまして、どのような問いかけ、例えば睡眠時間だったら、睡眠時間は何時間寝ているという話の中で、ここでではいじめが見抜けるのかどうかといいますと、寝つくまで何時間かかるのかとか、そういうふうなところ。今はスマホとかそういうものを見ながら寝つくのが遅いという問題も発生していますけれども、小学校1年生から、少なくとも中学3年、できれば高校3年まで、同じようなアンケートを続けていく中で、この子は少し寝つきが悪くなっているんじゃないかとか、そういうところでいじめの芽をあぶり出すような、そういうことができないかと。そして、アンケートは散発的にやって、それで機能しているのか。それとも、その子が高校を卒業するまで継続的にそのデータを集積して、そして見守っているのかどうかということも、私はここを問いたいところでもあります。

そうした中で、どういう場面で、そのアンケートの中でどういうところになるといじめが発生しやすい、そういうふうな状況に陥るといような芽を見るようなことはできまいかと。それぞれデータを蓄積していけば、こうなるといじめられている可能性があるよ、そういうふうなことを示唆ができるような、そういう情報が出てくる可能性もあります。そのアンケートの情報の取扱い方を、情報を集積して分析できるような、そういう社会になってきましたので、しっかりとアンケートを重視して、どのように運用していけばいじめは未然に防げるのか。そういうことにチャレンジしていければいいなと思います。

農業の言葉の中に「上農は草を見ずして草を取ると、中農は草を見て草を取ると、下農は草を見ても見て見ぬふりをする」という言葉を20年前に大学の教授に教わりました。教育の現場もそうだと思います。どういうところからいじめの芽をあぶり出すか。そして、それを摘むか。それができてこそその教育が成ると。そういうふうには私は思っております。以上です。

矢野委員長： ありがとうございました。
 他にいかがでしょうか。
 白井さん、お願いします。

白井委員： 静岡大学の白井です。
 いじめに関連して、そのバトンを引き継ぐ形で補足的に意見を述べさせていただきますと思いますが、まず芽を摘むということをおっしゃいましたけれども、貧困問題と関連してなんです、能力を伸ばすということ以前に、教育のベースとして教育の厚みがなくなっているのではないかと。もうすれすれの薄氷を踏むような教育になっていて、とにかく教員側の余裕がない。その背景には、少子化もあって、小学校、中学校の規模がどんどん人数が少なくなり、例えば単学級、1学年1クラ

ス、あるいは1学年2クラスという、教員の同じ学年の横のつながりもない。いじめをどうしようかと、不登校の子がいるんだけどということを相談できる、例えば学年主任と他のクラスの担任が話し合う機会がなくなる。学年会みたいなのがなくなってしまうですとか、あと当県の場合は、小学校のときに副担がいないですね。中学校は副担がいますけれども、副担がいない状態で、それこそ新任で教員になってすぐに担任を持つ。担任になったときにクラスの中に不登校の生徒が出たり、いじめがあったりすると、それが教員の評価に結びつけられてしまうというびくびくした状況で、相談できる環境もなく、教育を運営していかねばいけないという、本当に薄氷を踏むようなことが起こりかねない。それは人口構造的に、どうしても規模が小さくなってくると起こりかねない。

そこで、例えばICT教育があって、県で、あるいは市町で同じ共通のコンテンツを作ろうとか、中1の英語を教えている先生が、じゃあみんな集まって、共有コンテンツを作ろうみたいなことがあると、横のネットワークができていくので、そこでいじめとか不登校の話ができたり、横のつながりができたりするので、これは貧困問題といじめ・不登校問題とICT教育というのは一体となって前に進めていけることができるのではないかなと。今、現状認識としては、やはり教育の厚み、教える側の厚みをどういうふうにつくっていくのかということではないかなというふうに思います。

あともう一点、ICTと関連してなんですが、これはいじめ・不登校とも関連してくるんですけども、ホームスクール、家で勉強するということが不登校・いじめの子にとって救いになっていく可能性も大いにあるわけで、学校に行かなくても学ぶことができる、得意な分野を伸ばせる、勉強を伸ばすことができるというのはよいことなただけけれども、それがおうちでやってください、親が見てください、親が家にいることが前提になっている宿題が出るというふうだと、やはり家で見てもらえない子はできないということになっていくので、地域でそれをどう見ていくのか。例えば地域で自治会館に行けば教えてくれる人がいるとか、寺子屋と関連してくるんですけども、家庭だけの負担にしないで、ホームスクールができていくように、そこをICTを活用しながら、学校に行かなくてもコンテンツが見られて、基礎的な勉強ができる基盤をつくっていく。

今、卒検とかありますけれども、卒検だけではなくて、小学校、中学校についても達成度を測っていけるような、ICTなどを使って達成度を測っていけるような、またそれを評価していけるようなシステムというのにも必要なだろうなと思います。

いろいろつながっているなと思って、述べさせていただきました。

矢野委員長： ありがとうございます。

他にいかがでしょうか。

山 本 委 員

先ほど、お話もあったと思うんですけど、リモートでいろんなことができるわけじゃなくて、実際にサッカーの試合はピッチ上に行かなければ試合はできないし、そこで感情とか要するに心を育てるのがそういうところにいくと思います。

面白い現象が起きていまして、サッカーの試合で無観客から始まって、5,000人までオーケーになって、1万5,000人、3分の1入れるようになりました。無観客のときは、アウェーのチームがすごい勝率が高くて、ホームにお客さんを入れるようになったら、圧倒的にホームのチームが強くなったんですよ、勝率が。それぐらい、やはり急にサッカーの選手が変わるわけじゃないのに、心がそれだけ周りからの影響で、応援によって高まって勝率が上がっていく。ファン、サポーターと選手というのは一体になっているという、その心の変化が見えない限り、人の教育は僕はできないと思っています。いい仕事をするために何の勉強をするかということが重要だと思うので、教えることよりも気づかせてあげること、教えてしまうとそればかりやろうとして、そんなのがサッカー選手として一流になれるかといったら全くなれないわけです。自分の意思でやることは疲れない。指導者目線でいうと、説明がうまいということではなくて、説得できるかどうかですよね。説明というのは、ただ自分が説明しただけで、説得できるというのは、その子にとって何が必要かということ、それを本人が納得したかどうかということ、納得すれば自分の意思でどんどんやっていくようになるよみたいなことが大事な方向だと思うんです。

いじめの問題でスポーツの価値というのは、僕は人と人をつなぐことにあるんじゃないかなというふうに思っています、地域のマーケットというのはスポーツによって広げられるんじゃないかなと思っています。アスクラルロの僕は会長ですけども、子供だけで1,500人いるんですね。ということは、親とかおじいちゃん、おばあちゃんも入れたら、沼津でやっていますが、周辺のまちからもたくさん来ているので、とてつもない比率の人に関わっていただいているということがあります。そこでまちのコミュニティにスポーツが絡んでいくと、新しいマーケティングが必ず出てくると思っています。

クラブを地域で今大きくどんどん育てているんですけども、その育てる過程で地域のコミュニティが強化されるんですよ、人とのつながりが学校とは別にあって。そのコミュニティが強化されることで、本当に地域の子供たちへの、子供が中心ですから、目配り、気配り、気づきがたくさんあって、あの子どうしたのというのをその保護者、選手同士でみんなでもって共有する。その目配りが細くなることで、地域の教育レベルというのは落ちこぼれを防いで上がっていくんじゃないかなというのが、先ほどお話があったことと共通するんですけども、それはス

スポーツでかなりできるんじゃないかなというふうに思っています。

プロクラブというのは発信力もありますし、幸いなことに、静岡はサッカーでいえば東、中、西と、沼津、清水、藤枝、磐田とあります。こういうところでそういうポテンシャルがすごく地域全体にあると思うんで、参考までに、バルセロナという世界トップトップのクラブがあるんですけど、年間予算600億、700億円です。その半数が選手の人件費です。運営がその半分です。こういう中で、彼らは株式会社じゃないんですよ。バルセロナは15万人の会員のお金で成り立っているクラブであって、みんながその気になれば、バルセロナは多分200万程度のまちでカタルーニャの中心都市ですけれども、15万人の会員が会員費を払って成り立っているクラブなんで、大企業のもうかったお金でやっている形じゃないんで、カタルーニャの大衆クラブだからこそ子供たちを下のところから本当に育てて世界のスターに育て上げて、それをまた全体に経済的なことも含めてその600億、毎年稼がなきゃいけないですからね。そういうクラブになっていて、それによってスポンサーもたくさんついてきて、何と胸のスポンサーが楽天さんですからね。こういうお金が日本にうまく回れば、子供たちを育てるところにも。

育成にはお金と時間がかかります。サッカーで昨シーズン、国体で優勝させていただきました少年男子、静岡学園が優勝しました。藤枝順心がチャンピオンです。ということですので、育成3冠で静岡はすごいとサッカー界では言われているんですけども、でも8年前を見れば、どん底のどん底でひどい状態だったのが、いろんなことを改革して、やっと8年かかって、8年前に投資した12歳の子供たちがやっとやってくれました。そのぐらいのスパンで考えていくということが大事なんじゃないかなというふうに、お金と時間がかかるというのは人材育成の重要な気づかなければいけないところだと思います。以上です。

矢野委員長： ありがとうございます。

いじめ、不登校、子供たち、いろんな子がいると思うんですね。実際に美術館をおやりになって、何か感じるどころがあれば、お話を聞かせていただきたいと思います。

渡邊委員： ちょっとICTのことに一言。

私は佐野美術館の今理事長をしておりますが、昨年からNHKの青山教室でもって講座を頼まれて、その講座の内容は美術品ということですけども、日本刀のことをずっと話していたんですけども、この4月、5月は休んだんですが、続けてくれというんで7月は東京まで行って講義したんですけど、8月はまた非常に東京が増えたので周りが心配して、東京へ行っちゃいかんということで、それではオンラインにしようかといって9月に、今月の15日にオンラインで講座を自分の研究室で流したんですね。私は生まれて初めてオンラインで講座を持ったんです

けれども、いろんなテーマをその後感じましたが、すごい時代だなというふうに思いました。

それで、そのオンラインのやり方はいろんな方法があるということも勉強しました。NHKはお金かけたくないなので、こちらの持っている手持ちの機械で、そして各講座をお申し込みの人の手持ちの機種でそれを結んで、それが無い人は聞けないという非常にNHKの身勝手なんですけれども、一つのオンラインのつながりというのを私は初めて感じたんですね。

そのときに、話し方も講座の仕方もちよっと考えたんですけれども、やるなら、これで話したらアメリカでも講義できるな、アメリカにも伝達できるという非常に無限の広がりを感じました。やはりこういう世界の中で、知識とか情報とかというのは本当に見事な伝達の新しい時代になるんだなど。これをいろいろと工夫していったらば、子供でも、こんな私みたいなおばあさんでも、いろいろとできるんだということを初めて体験しました。この単位はずっと来年の3月まで続くのかな、それはやってくれとNHKで言われて、しょうがない。ちょっと不満けれどもやることにしました。それが1つですね。

だから、若い人はそれがすごくできるんで、私のようなほとんど機械が使えない人間でもできるようになったんで、若い人たちというのは本当に新しい文明の形というものを創り出すんだということを認識いたしました。それが教育に生かされたらば、全部まとまった教室で一律に学ぶのではなくて、その個性をおのおのに引き出すきっかけになるんじゃないかというふうなこともちよっと思いました。

それで、子供のいじめの話ですけど、私はちょうど大東亜戦争の真っ最中は小学生でして、東京から山梨へ疎開したときに、山梨の疎開先でうんといじめられたんです。というのは、東京はみんな洋服着ているんですけど、山梨の子供たちは着物を着ているんですね。もう生活様式が全く違うんですね。それで東京は女子と男子は別々の教室でしたけれども、山梨へ行くと男女共学なんです。隣の男の子にうんといじめられるんですね、つついたり何かして。私はほとんど1か月、母が学校まで送って行って、母が先生と話しているうちに私はするっと抜け出して野山へ行って1人で遊んでいるというんで、1学期学校へほとんど行かなかったのを覚えているんですけども。それから中学校でもいじめを受けたことがあるんですね。

そういう自分のいじめを体験するときに、自分の中に一つの自信を持って社会に参加できない引け目というのを、それが結局いじめにつながる。だから、いじめるといふのはいじめる方も悪いけれども、いじめられる方も悪いんですね。なぜいじめられるかということその子供が自覚して、自分で強くなればどうってことはないんですね。いじめはどこにでもあるんですけども、いじめられる方といじめる方と、その両方の問題があって、それを先生たちがいじめちゃいかんと言うんじゃなく

て、いじめられる方もいかん。その両方の人格というものをきちんと押さえることによって、かなりいじめは減るんじゃないかと思うんです。

いじめというのは子供だけじゃなくて、大人の社会もいっぱいあって、特に男性もいっぱいあって、そういうものもいじめる方が悪いんじゃないかって、いじめられる方も、そういう個としての自覚が、きちんと足に力が入るといじめは少し少なくなるんじゃないかというように思うんですね。

それは教師の方が個々の一人一人の性格の分析というか、そういうものをちょっと教育の世界の中では足りないんじゃないかと。人間のいろんな持って生まれた性格があって、それは四柱推命になってしまうんですけども、その一人一人の生まれた時代とか、その年とか月とか、それによって人々の性格がそれぞれ違う。その性格の分析みたいなものを教師がもう少しするとうまく調整をできるんじゃないかなという感じがして、ちょっと話が古めかしくなるんですけども、中国でやっている四柱推命、あれは中国の漢の時代にできたんですが、あれなんかも勉強していくと人間の持って生まれた人の性格がよく分かって、自分と合わない性格って絶対あるわけですけども、その中の自分との違いというものがお互いに認識するといじめなくなるんじゃないかと思うんですね。そういう単にいじめていけないのではなくて、持って生まれた人々の性格というものをもう少し勉強するというか、持って生まれた性格は変われないんですね。どうにもならない。そういう性格を勉強する機会がもう少しあると、世の中はもう少しならかにというか滑らかに、そしてお互いに協力できるんじゃないかなという気がします。ちょっと問題、外れたかもしれませんが、以上です。

矢野委員長： ありがとうございました。
 では、加藤さん、どうぞ。その後は森谷さんですね。

加藤委員： ありがとうございます。
 私も今、渡邊先生のお話をお伺いしていて、1960年代に帰国子女のはしりで、帰国していじめられた思い出を思い出しちゃったんですけども、やはり異質なものに対していじめというのは起こることが多くて、多様性を認めるという、今そういう方向性にありますけれども、多分静岡も外国籍の人たちも多いので、この問題というのはかなり深刻な問題もあるんじゃないかなというふうに思っています。

 それで、参考資料の3ページ目のところのアンケート調査であるんですけども、いじめ発見のきっかけというところなんですけど、大人が見つけて、本人の保護者からの訴えとかが結構多かっただけあってあるんですけど、その中で注目したのは、他の児童・生徒からの情報というのがあるんですね。ここをもうちょっと活用して、いじめ対策をするということも必要なんじゃないかなあと。

私も自分の過去のいじめられた経験でいうと、いじめた友人じゃなくて、その他の周りの人たちが助けてくれたんですよね。私はリーダー育成をしている立場からいうと、各学校には例えば生徒会があったり学級委員がいたり、中学生ぐらいであれば同じクラスの子だったり生徒同士で解決するということはすごく大事なことというか、むしろそれで何か解決することが、大人から言われるより、あるんじゃないかなと思うんです。

ですから、そういう意味における学校なり地域でのリーダーシップを育成する教育というか、いじめがあったときにどういうふうにしたらいのかとか、それからみんなで助け合うというようなことを同世代がしていくために大人が学校現場であったり先生だったりフォローしていくというような、そういった面もちょっと考えてみたらいいんじゃないかなというふうに思います。以上です。

矢野委員長： ありがとうございました。
 森谷さん、お願いいたします。

森谷委員： 森谷です。よろしく申し上げます。

最初に、先ほどお花の話が出たんですけれども、今日はZ o o m会議ということで画面を見て、一番最初にお花があるなと思って、こういう堅いというか県庁の会議でもお花が出てくるんだと思ひまして、また次回、お花の説明があると嬉しいと思います。

私からはお伝えしたいことは2つあるんですけれども、1つ目は今話題になったいじめのことなんですけれども、ちょっと御提案がありまして、実はユネスコ協会の方で取り組み始めていたことなんですけれども、子供たちの言葉や呼吸が今すごく乱れているものですから、そこら辺から心の平和というユネスコのテーマに沿って学校にアプローチできないかと思ひまして、ちょっと手前みそなんですけど、私20年以上非常勤をやっていて学校の現場でもやっていることがあって、それが呼吸法なんですけれども、今マインドフルネスって割と広がっていて、マインドフルネスまでいかななくても呼吸とか、ヨガの呼吸法もすごい広がっていると思うんですが、自分の授業では効果がすごく絶大で、とにかく注意する場面が減りました。この呼吸を整えると、自分で気づくことができて自分を客観視することができるので、むやみに叱りつける場面も少なくなりますし、自分で行動してくれるようになります。

これがいいなと思って、できれば静岡の教育、他の小・中・高でもと思って動きましたら、面白い情報があって、呼吸法ではないんですけども、黙想というものなら浜松でやっているよと言ってくれた人がいて、どのくらいやっているのと言ったら、1日8回やっているというんです。朝夕の朝の会、帰りの会、それから6回の授業の前、約1分間、呼吸ではないけど静寂する。本当かと思って、ちょっと見に行きまし

て、浜松の三方原中学校まで取材に行っただけです。そうしたら本当に想像を絶する風景で、それを子供たちが主体になってやっているですよ。授業が始まる前に着席して、始業ベルと同時に子供たちが「黙想」って声をかけるんですね。それが学校中に「黙想」って声が響いて、全学校1分間の静寂、凄かったです。これを1日8回やっているという、凄いですねと言ったら、浜松は全ての中学校でやっていますけどと言われて、それで校長会の方に聞いてみたら、本当に多分ほぼ全ての中学がやっている。

また調べ始めたら、磐田でもやっている、掛川でもやっている、袋井でもやっているということで、今度は袋井中学校に取材に行きましたら、小中連携で両方やっていたんですけど、小学校の子もやっていました。中学校の方、教頭先生の話を書きましたら、これに力を入れるようになってから、とにかく自分で気づけるようになった。それから、学年集会や学校集会でも、今まではおまえら静かにしろみたいな感じだったんですけど、今はきつく注意をすると、繊細な子が周りのお友達がどなられているだけで不登校になっちゃうんですよ。なので、なるべく現場では生徒を汚い言葉でどなりつけるのは控えたいという流れなんですけど、これを始めてから学校集会、何百人ってそろいますでしょう。普通だったら最後はざわざわになるんですけど、静かにしろの嵐なんですけど、最後の1人が体育館に入った瞬間にさあっと本当に静寂が広がり静かになります。どなりつけることもなくなって、これを強化していきたいということだったんで、できればこの委員会でも三方原中学校とか、ぜひ見学に行けたらいいなあと思っているところです。この黙想に呼吸の要素を入れたり、少し顧みる言葉を入れてあげたりするとかなり自分をコントロールする力がつくと思います。

いじめっていうのは、思うんですけど、いじめがいけないよと言ってもほとんどの子供は善悪の基準が分かっているんで、なぜ善悪が分かっても、いじめは自己コントロールができないからだと思うんです。もう少し客観視することができてくれば、自分の良心に沿って行動できるんじゃないかなと思います。

続けてで申し訳ないんですけど、もう一つお伝えしたいのが、高校の進学校の学びについて、これもぜひお伝えしたいことなんですけれども、特に不登校のことについてなんですけど、静岡に関わらず全国的に高校の現場というのは、進学校は約20年前に大きく風景が変わりました。関わっていらっしゃる方、皆さんも記憶にあると思うんですけど、その20年前何があったかといいますと、全国的にバブルがはじけて、それで塾に行けないお子さんが増えて、保護者の方から学校で塾の機能もやってほしいという声が上がりました。

それともう一つは、子供たちの自主性が下がって自主自学ができなくなっていて、今までは進学校では基本的には宿題は出さないところが多かったんですけど、宿題を出さないとなると進学できないということで、

塾の機能を添えるということと、自主自学ができなくなったこともどうするかということで、特に東大に入れてきた高校では、東大の進学者がゼロになってしまった年もあって大騒ぎになって、首都圏の方ではかなり管理型でやっているということで、方向性を変えて管理型になってきたのが20年ぐらい前だったと思います。

ただ浜松北高校ですとか静岡高校は、やはり自主自学が誇りでありましたので最後まであらがっていたんですが、それでも周辺の進学校に結果として負けてしまうので、北高とか静岡高も15年ぐらい前から管理型に入ったことがあり、実は今日の委員会のためにいろんな先生にちょっと取材をしてきて、皆さんも異口同音にあの頃だったと。これでいいのかなと思ったけど、結局は結果が出てしまったということと、それからデータを残している学校があったので、その生徒課と養護の先生にもちょっと取材をしてきたんですが、その学校では特に、6、7年前からこの管理型を入れてきたんですが、それまでは不登校ゼロだったのが管理型を入れた瞬間に20人前後に跳ね上がって、どんどん増えているということすごいですよ。

管理型と私今言ってしまったんですが、具体的には課題の多さなんですね。それで、進路指導をがっちりやるものですから、課題が各教科でもう弾丸のように出てきて、1人の生徒に対してやりおおせないほどの課題が出るんです。職員室の方では各教科の連携が、それこそ先ほど話題にあったように連携ができていないので、数学でどのくらい出ている、英語でどのくらい出ている、国語でどのくらい出ているという調整が全くなくがんがん出てきて、これだけやれば、これだけやればという先生たちも一生懸命ですごく疲弊しているんですが、生徒の方は本当に消化ができなくて、現状としては、生徒の声は、いつも不安である、追いかけている、それからだんだん眠れなくなったり、朝7時半から朝課題が始まることもありますので、脳みその状態としてどうかなという養護の先生からの心配もあります。

ただ、すごくつらい報告なんですが、このがんがん与える管理型をしてから上の結果は飛躍的に伸びているんです。結果というのは、国公立何人とか、旧帝大何人、東大何人というのは確実に出るので、高校の顔としてはすごくいい状態になるんですが、そのデータとしては、残念なことに管理型を強めれば強めるほど全体の偏差値が下がっていているんです。つらいんですが、入学時より下がっているというんです。ただ、上の結果が上がっているのも、結局ついていけない子、県内の進学校というところすごく偏差値にばらつきがあるので、上の子についてはばっと伸びて、学校のおかげで行けたというのはあるんですが、半分から下の子は全くついていけないんですよ。それで消化できない課題と不安感と、自分の自信喪失でそれを私ずっと見てきて、本当に涙ながらに語る先生もいて、逆にこれでいいと思っている先生ももちろん現場にはいるし、管理型で育てて教員になっている先生もいるので、自分が

されたことをそのまま反映している先生もいらっしゃるしで、現場はすごく難しいところにあります。

お願いとしては、できれば校長先生は任期も短いし、管理職の先生はなかなか把握しきれていないと思うので、進学校のそういった状況をもう一度よく見ていただきたいということと、願わくは自主自学を20年前に遡って、もう一回取り返すように。せめて自分の課題ぐらい自分でプログラムして、与えられたものを選択できるように、自分で自分の学びをプログラムできるようなシステムを取っていただきたいなど思っているところです。

すみません、長く話しました。以上です。

矢野委員長： ありがとうございます。

山浦さん、いかがですか。その後で星野先生、お伺いしますね。山浦さん、どうぞ。

山浦委員： 私は小学校とか中学校のコミュニティ・スクールということで、地域の大人とか企業と学校をつないでいたりですとか、あとは寺子屋とって地域の子供の居場所というのをつくってきたり、高校の職業人インタビューとかインターンシップのことをやっているんですけども、まずこの資料2の一番上にある多様な人材を育てるためにはとあるんですが、多様な人材を育てたいのに画一化された教育がまだまだ続いているということにもとても課題があると思っていまして、今の宿題がたくさんということもそうなんですけれども、OECDの学力調査の結果でも、学力は高いけれど何で学んでいるのか分からないし、これが将来役に立つのかも分からないし、面白いとも思わないし興味もないみたいな結果が日本ではとても多くて、そこもとても課題だと思って、いろんな大人と出会って自分の今の学びがどうつながっているかというところが子供が腑に落ちるよというところをすごく意識して活動しています。

夢に向かって挑戦できるようにしていくということなんですけれども、挑戦するにはやはり安心・安全、自分がこれやりたいと言ったときに許されるとか、やってみて失敗してもいいんだよと言ってくれる大人がいるということがとても大事、周りの子たちも失敗したとみんなが指を指して笑うようなことがいじめにもつながっていくかなということも思っていまして、その安心・安全な場で自ら学ぶとか、意思のある学びということができていけばきっとみんなそれぞれ違いということも共有していけるかなと思うんですけど、画一化した教育もそうですし、日本人特有かもしれないけれども、人と同じであろうとしながらも人と違うところを出そうとするとか、違いを持つとするので、私はあの人より劣っているとか進んでいるとか、優れているというところを見せたいがためにいじめというところにもつながっていくのかなとも思います。子供ってそれが全てになってしまうと家でも居場所がなかったり学

校でもいじめられてしまうと、もうどうにも自分が生きていく場所がなくなってしまうので、やはりサード・プレイスが子供にとっても必要だなと思いますし、何か解放できる場所、それがさつき美術館の渡邊先生がおっしゃっていた野山を駆け回るでもいいですし、サッカーだとか芸術だとか読書だとか、自分の世界というか自分が邪魔されないで解放できる場所というのがあったらきっといいんじゃないかなというふうにはすごく思いました。

勉強だけができればいいわけではなくて、仲間がつくれたりだとか、自分の好きなものとかやりたいことというのが認められる社会になったらいいのかなと思うんですね。自分軸をつくるには、小さい頃って絶対やりたいことがあったはずなんですよね。でも親に、危ないことはもちろん止めなくてはいけないんですけれども、それはやっちゃだめとか、後でねとか、後でねと言って、本気に後でやらせてくれる親はどれだけいるかと思うんですけど、洗濯機が洗濯してくれるし、調理器が調理してくれたり、今は別にそんなに忙しいはずではないんですけれども、何か親も後でね後でねと言って、子供がああそうと言っているうちにもうやりたいことが分からないし、否定されるし。

私、若者の就労支援とか生活困窮者の就労支援もしているんですけども、やりたいことが分からないとか、好きなことが分からないという若者がとても多くて、でもサッカーやっていたでしょうと聞くと、それは親がやれと言ったからやったんだ、別に好きじゃなかったけど、親に評価されるために、先生に評価されるためにやっていたんだという声を聞いたりするととてもつらくなってしまって、それが切れたときにひゅっと引き籠もってしまうんじゃないかなと思いました。

引き籠もるにも理由があるんでしょうし、いじめるにも理由があるでしょうし、先ほどいじめられるにも理由があるんじゃないかというお話がありましたけれども、それぞれみんな理由がきっとあると思うので、複雑に絡み合っているとは思いますが、相互理解ができるような、みんながそれを自分ごととして、そういうこともあるよねと言えるようなサポートといいますか、お互いの立場を共感したり思い合ったりということが出来るような時間が取れたらいいなと思うのですが、それは先生が大変だと思うんですけど、大人、親でもいいんです。そういうこともあるよねとか、失敗しちゃったんだねとか、次があるよとか、失敗しても大丈夫だよと言ってあげられる場所があれば、そういう人が一人でもいれば子供たちは救われるんじゃないのかというふうに思いました。

才徳を育てるといふところの才だけを育てても駄目でしょうし、徳を育てるには才の部分の活動の中で徳が育っていくでしょうし、徳があるからこそまた才が伸びていくんじゃないかなというふうに思うと、その両輪でやっていくことがとても大事なんじゃないかというふうに思いました。

いじめの問題はとても大変だと思うんですけども、相互理解ができ

るような場づくりを、子供たちの変化を拾って、返してあげること、最近元気がないねとか、本当にそんな一言でも変わるんじゃないかなというふうに、若者たちとか子供たちを見ていて思います。

まとまりませんが、以上です。

矢野委員長： ありがとうございます。
星野さん、お願いします。

星野委員： お願いします。

いじめに関して、予防教育が大切だと思います。いじめる、いじめられるというところで、学校としても非常にケースが多様化しています。私としては、今学校の方ではハラスメント教育だと。ハラスメントのところをしっかりと、大人になってそういう社会になっている。その子供の頃からしっかりと教育しようということにしています。ジェンダーの問題もそうですし、ICTリテラシーもそうだし、ダイバーシティに必要な国籍とか多様性の問題ですね。そういうのがハラスメントのことでいくとケーススタディがたくさんありますので、学校現場でもそのことをもっとやれたらいいんじゃないかなというふうに思いました。

もう一点、特別な支援を必要とする子供たちに関しては、個別最適化ということでアダプティブラーニングということで様々なコンテンツが既にあります。atama+だったり、すららだったり、いろいろ民間企業が作っています。

どういったことかといいますと、タブレットで勉強して行って、問題が解ける子はどんどん難しい問題ができる。できない子はまた戻っていく。日本というのは同じ内容を同じスピードで一斉に教える。分かっている子はいける。分からない子は置いていかれてしまう。中学生でも小学校6年生の算数に戻ったり、またできると中1に行き、またできると中2に行き、そういうコンテンツが既にあります。

ですので、今回特別な支援を必要とする学力に関しては、そういった個々の課題を個別に解決するコンテンツを作るというのは全国的にもまだありませんので、ぜひ静岡県が先駆者となってやっていただくと非常に興味深いかと思えます。

最後、ICTに関しては様々な取組で可能性があります。国際交流なんかでも時差が少ないタイの学校と週1回、普通にディスカッションができる。あとは飛び級ができます。中学1年生でも高校2年生の授業が受けられる。大学の講義にも出られる。逆に言うと、大学生がゼミのディスカッションで中学生、小学生の意見を聞ける。企業の商品開発とかの会議にも参加できるとか、そういったことがメリットであると。

また、通常の学校では空気を読まなければいけないので、活発な生徒は活躍できます。しかし、本来同様に見てあげないといけないはずのおとなしいけどしっかりした考えを持っている子がオンライン授業だと、

チャットとかそういったもので発言できて、思わぬ活躍をするというシーンをたくさん見てきました。

今後は、学校の先生はもうティーチャーという概念、教えるという概念ではなくてコーチングであったりとか、あと対話型のメンターであったりとか、導き型のファシリテーター、いわゆる大学の教育養成の段階からしっかりと鍛えていくということが今後必要なのかなと思っています。

前に立って、私は知っていますよといって偉そうにできる時代はもうとうに過ぎていきますので、そこをAという生徒とBという生徒の意見を掛け合わせたりすることで4倍も5倍も新たなものを創出するというクリエイティビティとか、そういったスキルを教員研修で積極的に実施するなど、そういったこともまだどこの自治体もやれていませんので、こういった観点の教育を公立、私立関係なく連携してやるということ非常に大きなインパクトがあると思います。以上です。

矢野委員長： どうもありがとうございました。
渡邊さん、何かありますか。何かありましたらお願いします。

渡邊委員： 短く。簡単に言いますと、昭和時代の教育というのはみんな同じことをやるように教育されたんですね。平成になって個人個人の教育が変わって、個性を生かそうという趣旨でした。でも、平成の時代に育った子というのは、その個性をまだ自分で表現できない時代だと思うんですね。

この令和の時代になって、ICTも手伝って、私は個性を伸ばせる時代に日本の社会がそうやってきたというふうに思います。非常に期待しています。以上です。

矢野委員長： ありがとうございました。
子供たちを見ると大きな集団があって、それを物足りないと思っている子供たちもいるわけですね。一方では、追いついていけないというんで悩んでいる子供たちもいる。両方をどのようにしていくかということが大きな課題だろうと思います。

スポーツの世界も、伺っておりますと皆同じようでございます、そういう点でちょっと光を当てて、どうしたら本当の意味での才能を伸ばせるか、補えるかというようなことをまた今後検討していきたいと思えます。

それでは、予定の時間がほとんどなくなりまして、皆さんもっと御発言されたいと思うんですけども、次回に譲らせていただきたいと思います。

それでは、一応これで皆様の御意見を次の総合教育会議に提案して参ります。

知事から一言、最後にいただきたいと思います。

川 勝 知 事： 皆様方、ありがとうございました。

前のお花はこの6年間必ず備えてございまして、ウェブの方たちにめでていただけないのが誠に残念でございます。バラとカーネーションとスプレーカーネーションとトルコキキョウが、ピンク系でカラーコーディネートをしらって添えられている。

ですから、今日は座長を入れて7人の委員、それからそちらに10人ぐらいいらっしゃるけれども、やはり一緒に議論したかったなというのがあります。

20年ほど前に、国交省の委員会で新しい生活様式をやったときに、マイクロソフトジャパンの成毛さんという人が委員の一人だったんですよ。その人が言っていました。会社はもう辞めたと。というのは、会社で仕事をするのは止めたと、全部家でできるから。ではどうするかというと、夕方、居酒屋で集まるんですって。みんなそのときは感心して聞いていたんですが、その居酒屋というのは取締役会もそこでやるというわけですけども、いかにフェース・ツー・フェースというものが、マイクロソフトのようなICTのトップ企業において、一方でフェース・ツー・フェースが重要だということを物語っているんじゃないかと思えますね。

それから、今日は座長の方から小さく産んで大きく育てるとおっしゃいました。それとの絡みで、細部に神様が宿るんだとおっしゃいましたけれども、これはレオポルト・フォン・ランケという歴史学者が19世紀に言った言葉です。これは、それまで迷信とか信仰で歴史を見ていたのを事実に基づいてやるという。事実はそのに具体的ですから、そこを実証して歴史を再構成すると。

例えば同じドイツで、マックス・ウェーバーという人が、職業として学問をやる人は、古文書の擦り切れたところがあると、そこがどういう意味があるかということに一生かけられる人でないと職業としての学問をやってはならんというふうに言っているぐらいでございまして、我々はこれを小さく産んで、具体的な問題を解決する中から大きくこの社会を変えていくというふうにしていきたいということでございます。

今日はICT元年という言葉も出まして、それから生徒さんが先生に教える、下級生が上級生に教えると、そういうことも可能な時代になったと言われましたが、これは教育だけでしょうか。そうではありません。社会全体にとってICT時代が、ICT元年と。これがこのコロナウイルスがもたらした社会の新しい道筋が、ツールとしてICTが重要になるということではないかと思えます。

それは学校教育を根本的に変える、そういうパワーを持っていると。ではどう変えていくかという、そこをここで議論しなくちゃなりません。少なくとも、明治5年に学校制度が導入されました。それまで学校

はありませんから、寺子屋しかありません。3万あったんですから、日本に。その3万のうちの一部が、政府が学校制度を導入する前にもう小学校制度に変わっています。そういう時代が150年近く続いてきましたけれども、それが今終わりを告げつつあるというふうに思っています。

白板ないし黒板に外国人が英語やドイツ語で書いて、それを日本語に訳すというところから始まって、今に至るまで白板、黒板を前にして教壇から先生が生徒に語るという時代は終わった、いや終わりつつあるということでもあります。

しからばどうするかと。差し当たって、文科省という厄介な存在がございまして、私はそれ要らないと思っているんですけども、学習指導要領というのがあります。これは守らないと教育委員会がやっていけないんですね。ですから、英・数・国・理・社はオンラインで進路指導に応じて、個人に応じてやればいいと。それ以外、例えば絵を描いたり演劇をしたり、サッカーをしたりラグビーをしたり等々、そうしたものがこれから中心になっていいと。こういう時代で、静岡から社会全体を、ICTをどのように活用していくかということと、学校の今の在り方を変えると。

ですから、もう東大だとかいい大学に行くということで高校のランキングをするという時代は、これをやめなくてはいけないというふうに思います。そういういわばラジカルな変革期にあるということ念頭に置きながら、これから議論をしていただきたいと。

しかしながら、演劇もサッカーもラグビーもそうですけれども、やはり実際に見る、知る、経験する、肌で感じると、五感ですね。これがいかに大事かということでしょう。

ちなみに、静岡ショックというラグビー、昨年大成功しましたが、これはこの実践委員会に清宮君というラグビーがいて、彼が子供たちにそのテキストを強制ではなくて好きな学校に配付をするという、場合によってはその授業の、ラグビーマンが出かけて行ってコーチをします。これを行った結果、子供たちがラグビーのルールを知ったんですね。あるいはラグビーのスピリットを知ったわけです。これがあの会場で、ジャパニーズのこの代表がアイルランドを破ると、そういうものにつながったというふうに思っていますが、これは実はこの実践委員会の成果の一つだったと私は思っております、今度はこのICTについて、いろんな意見が出ました。

しかも、今日面白かったのは、17人の委員のうち7人が実は新人なんですよ。新人が新人に見えないと。特に、女性が全く遠慮なしに堂々と言いたいことをべらべらしゃべると、こういう非常に自由闊達な委員会に初めからなったということ喜んでおります。できる限り早くコロナウイルスを終息させて、この会議自体は顔を突き合わせながら口角泡を飛ばして議論したいというふうに思っています。

今日は本当に皆様方ありがとうございました。厚く御礼を申し上げます

す。

矢野委員長： どうもありがとうございました。
これからも皆さん、よろしく願いいたします。
それでは、進行を事務局にお返しします。

事務局： 長時間にわたり、御審議いただきましてありがとうございました。
なお、第3回の実践委員会でございますが、11月25日の開催を予定してございます。詳細につきましては、後日、事務局から御連絡申し上げますので御承知おきいただきたいと思います。
以上をもちまして、第2回地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会を終了いたします。
本日は本当にありがとうございました。